
桜香

莉奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜香

【Nコード】

N4004S

【作者名】

莉奈

【あらすじ】

父親を捜すために京へ来た雪村千鶴。そこで新選組の沖田総司と出会う。惹かれあい、そこから始まる2人の物語。

お話を読む前に（前書き）

原作を軸にしてはいますが、基本的にオリジナルのお話です。
設定をまずお読みください。

お話を読む前に

桜香をお読み頂き、ありがとうございます。

原作を軸にしていますが、基本的にこのお話はオリジナルです。戦いの描写もありますが、総司と千鶴中心のお話となります。

また設定も原作とは違う部分もありますので、よろしくお願い致します。

【オリジナル設定】

雪村千鶴

- ・ 傷がすぐ治る他に、癒しの力がある。
- ・ 剣の腕前は、一般隊士よりは上です。
- ・ 舞が趣味。師範クラスです。

※他の登場人物は、ほぼ原作と変わらないです。

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

それでは桜香を少しでも楽しんで頂けたら、嬉しいです。

お話を読む前に（後書き）

ここまで読んで頂きありがとうございます。

出会い？（前書き）

戦いの描写があります。
苦手な方はご注意ください。

出会い？

「どうしよう・・・」

少女――雪村千鶴は、溜息をつき頭をかかえる。

（京まで来たら大丈夫だと思ったのに）

用事のため京へ行った父からの連絡が途絶え、不安を覚えた千鶴は父を捜すために江戸から京へ行くことを決心した。

道中の安全も考え男装をし、父の知り合いである松本良順を訪ねるところまで来たが、なんと不在であった。

長い道のりで疲れも溜まっていたが、京へ行けば父の行方が分かる信じここまで来たが、目の前の現実には気持ちが沈んでいく。

しばらく呆然としていたが、気持ちを切り替えることにした

「松本先生には手紙を先に出して知らせてたし、そのうち会えるよね」

なんとか前向きに考え、とりあえず聞き込みを開始する。

人の良さそうな人達に声をかけ聞いていくが、知る人はいなかった。時間だけが過ぎていき段々と人通りも少なくなり、辺りも暗くなる。いくら男装をしてもこの時代、特に京の夜は危険である。

「早く宿を見つけないと」

人が少なくなるにつれ不安になる。

江戸で1人父を待っていた時も不安であったが、今の状況も千鶴にとっては不安である。

足が自然と小走りになり、宿の方へ進めていると、急に角から3人の男が出てくる。

「あっ！」

「いてえっ」

運悪くその内の1人とぶつかり、2人とも尻もちをつく。

しまったと思い、すぐに立ち上がり男の方に歩み寄る。

嫌な予感がしたので一言謝り素早くその場を立ち去ろうとするが、男達は、ニヤニヤしながら近づいてくる。

「謝ってもらうなら、不釣り合いなその立派な小太刀を俺達にくれよ」

近づいてくるにつれ、男達からお酒の匂いがしてくる。

ここまで匂うということは、きっと昼間から相当飲んでるはずだ。

千鶴が黙っていると余計に男達は言いたいように言ってきた。

見た目が小柄な少年に見えることから余計に増長させているようだ。

この小太刀は代々家に伝わる大切な物だと父から教わっている。

そのような物をあげられるはずなどない。

また千鶴は女の身でありながら、父親の教育方針で道場に通い真面目に鍛錬を積んだ結果、腕前は相当のものになった。

ジッと男達を観察する。

（酔ってるし、多分大丈夫だけどあまり騒ぎを大きくしたくない）

そう考え、背を向け勢いよく走りだす。

後ろから罵声が聞こえるが、気にせず逃げる。

酔っている男達なら勝てる可能性の方が強いが、あくまでも可能性

である。

試合はしたことがあっても真剣での実践経験があまりない。
結果逃げることを選んだ。

「もうっ！しつこい！」

思わず声に出してしまうほど、男達は執拗に追ってきた。
酔っているからすぐに諦めると思ったが、逆だったようだ。
酔っ払いほど性質が悪い。

旅の疲れもあり、だんだんと走る速度も遅くなってきたことが分かる。

辺りを見回すとちょうどいい隠れる場所があったので、そこに身を隠す。

「どこへ行った？」

「この近くだろう」

男達の声がだんだんと近づいてくる。

自分より格下だと信じ切っているようで、焦りは見えない。
声も楽しんでいるように聞こえる。

溜息をつき、戦うしかないかと決心したその時雰囲気ガラリと変わった。

（なっ何なの！？）

鳥肌が立ち、冷や汗が出る。

「ぎゃああああー！！」

「やっやめてくれっ」

悲痛な叫びの後に嫌な音がした。血が吹き出る音だ。

「ぎゃははははっ」

人とは思えない、純粹に殺しを楽しんでいるような声が響く。得体のしれない何かが近くにいて男達を襲っている。

本能で危険を千鶴は感じた。

体が震えるのを両腕で懸命に抑える。

震える体でなんとか後ろに少しずつ動くと積んでいた桶に体があたる。

（あっ）

それまでの騒がしい雰囲気は嘘のように桶の崩れる音だけが無情に響く。

体から血の気が引く。

足音がどんどん近付いてくる。

（逃げないと、逃げないと！）

そう思っているのに金縛りにあっているように動かない。

千鶴の目の前で足音が止まる。

目だけを動かし、男を見上げた。

今日は満月で、だから余計によく見えた。

人とは思えない白い髪と血のように赤い目の男がそこにいた。

表情は、新しい獲物を見つけて嬉しそうに笑っていた。

出会い？（後書き）

ここまでお読み頂きありがとうございます。

亀更新になるかもしれませんが、最後まで頑張りますのでよろしく
お願いします。

？（前書き）

今回も戦いの描写があります。苦手な方はご注意ください。

？

人とは思えない白髪に赤い目の男は、次の獲物——千鶴を見つけて笑う。

また人を切れることが嬉しそうな顔だ。

お互いの目線が合い、時が止まった感覚がした。

とても残酷な一瞬…。

男からの醸し出す空気がまた変わる。

(…来る！)

小太刀を抜き男からの一撃を受け止めすぐに後ろへ引く。

ここは路地なので狭く小太刀の方が有利である。目の前の敵に集中し姿勢を正し構える。

先ほどの攻撃で男の力の強さに内心千鶴は驚いていた。

男女の力の差で、強いのは当たり前だ。それでも実地経験は少なくとも、試合などの経験から異常だと感じた。

混乱しそうな頭をなんとか冷静に保とうとする。

力も上、剣の腕も相手が上、それ以外に相手よりも勝るものは小柄な体を生かした速さしかない。

男の後ろに同じような容姿の男はあと2人いる。

この男に万が一勝てても、今の千鶴の体力では限界がある。相手からの攻撃を受けているだけでは明るい未来はない。

(ここは先手必勝あるのみ！)

父を捜しに長い道のりをかけてここまで来たのだ。死ぬわけにはいかない。

地面をけり、相手の懐へ入る。
そして――。

「ぎゃあああ！」

千鶴の剣が男の腹を切る。耳を塞ぎたくなるような声を発し、男が地面にうづくまる。

初めて人を切った感触に顔を歪めるが、すぐに我に振り返り背を向け走り出す。

（泣くことは後でいくらでも出来る。今はこの隙に逃げるしかない！）

それでも男の様子が気になり、視線だけ向けると笑いながら立っている姿が見えた。

「なっ、なんで……」

あまりの衝撃的な光景に足が止まる。

千鶴の力では致命傷は難しい。しかし、それでもすぐに立ち上がり、まして笑える怪我ではないはずである

悪夢を見ているようだった。

着物を血で赤く染めた男が近づいてくる。

自然に体は震え、後ろへ下がる。

今度こそ駄目かもしれない、けれどあきらめたくもない。

でもどうやったら勝てるのか、千鶴には分からなかった。

迷っているうちに間合いに男がいて剣を振り上げていた。

間に合わないと分かっているにもかかわらず、目の前に浅黄色の羽織が広がる。

「えっ…?」

白髪の男の剣を軽く受け止め、突然現れた男は千鶴を庇うように立っている。

浅黄色の羽織を着た男は、そのまま神業のような速さで男達を切っていた。

断末魔の声とともにあっという間にその場は静まりかえる。まるで何事もなかったかのように。

けれど確かに白髪の男達は地面に倒れていて、夢では決していないことが分かる。

「ねえ、大丈夫?」

浅黄色の羽織を着た男は千鶴に近づき、声をかけてくる。

呆然としていたが、その声に我に返り男の目をきちんと見る。

「…大丈夫です。助けて頂いてありがとうございました」

本当は大丈夫ではないことは男には分かっているのだろう。

体が震えているのを必死に押さえているのだから。

それでもそのことには触れず男は嬉しそうに笑う。

「お礼がすぐに言えて偉いね。素直な子は嫌いじゃないよ」

先ほどまで戦っていたとは思えないほどの笑みだった。

月の光が男を照らす。その姿はとても幻想的で千鶴は自然に見つめていた。

これが沖田総司と千鶴の初めての出会いであった。

？
(後書き)

やっと2人の出会いを描くことができて嬉しいです。

これから少しずつシリアスから脱出していくつもりです。

(多分)

ここまでお読み頂きありがとうございました。

?

「僕の名前は沖田総司。君は運がないね。可哀想だけど僕達にとって都合の悪いものを見てしまったから、一緒に屯所まで来てね。逃げようとしても無駄だから」

本当に可哀想と思っているのか疑問だが、笑みを浮かべながら千鶴を見る。

笑いながらも隙は見せない沖田の様子に溜息をつきながら、小太刀を鞘に戻し頷く。

「うん、偉いね」

「相手の力量ぐらい、さっきの戦い方を見たら分かります」

だから抵抗はしません。それに殺気は感じられないので、という千鶴にまた面白そうに沖田は笑う。

本当はさっきの白髪の男達といい、目の前の沖田といい分からないことだらけで不安である。しかし、裏はありそうだが自分を助けてくれたことと殺気は感じられないので大丈夫だろう。いまのところは。

「なに勝手に自己紹介してやがる。余計な情報は与えるな」

気配を感じなかったが、千鶴の後ろに男がいた。

振り返り男の容姿に驚く。

そこら辺の役者よりも顔立ちが整っており、桜の花びらが舞う中で凛と立つ姿は醸し出す雰囲気によく似合っていた。

眉間に皺を寄せ、見るからに不機嫌ということが分かるので、直視

すると怖いため視線はすぐに下げる。

沖田は男の登場で今までの笑みから一変し、ムツとした表情になる。

「自己紹介は礼儀ですよ。それにこの羽織を見たら正体だって分かるでしょう」

「だからって自分から名乗り出るな。人が来る前にさっさとここから立ち去るぞ。斉藤、あとは頼む」

「御意」

突然現れた斉藤と呼ばれた男に驚く。

ここにいる面々は気配を消すことが優れているのだろう。急に現れるので心臓に悪い。

斉藤と呼ばれた男は頼むと言われただけで男の言いたいことを理解しているようで、とても優秀だと分かる。

斉藤に声をかけ、男は何も言わず歩きだした。

沖田に行くよ、と声をかけられたので千鶴も付いていく。

歩きながら、その浅黄色の羽織は京では有名なのだろうかと疑問が浮かぶ。

前にいる男や斉藤と呼ばれた男も同じ羽織を着ていた。

沖田の台詞が正しければ有名なだろう。

京に來たばかりの千鶴には分からないが、知らないと言っても特に何も変わらないと思ったので、そのまま黙っておくことにする。

千鶴としても近くに倒れている男達の姿は見ないようにしていたので、ここから離れるのは賛成だ。ただ、自分が連れていかれる屯所がどんなところか分からないので、新たな不安はあるが。

(どうかこれ以上のことは起こりませんように)

そう心の中で願うが、先ほど沖田が言っていた都合の悪いもの――白髪の男達を見たことで良いことが起こりそうにはなかった。つまり今以上に状況が悪くなる可能性は十分ある。

もはや当たり前になった溜息をまた出す。

今日1日で何回溜息をついたのだろうか。幸せがどんどん遠ざかっているような気がしてならなかった。

ただ父親を捜しに來ただけなのに。

なんでこんなことになったのだろうか。

千鶴が心の中で不平不満を言っていると近くにきた沖田が今までで一番楽しそうに顔を近づけ、耳元で話しかけてきた。

「さつきから百面相だね。面白いから見てていたいけど、鬼の副長さんが睨んでるからきちんと前を見ようね」

「つつっ!!」

急いで前にいる男に目を向けるが、一睨み（沖田に向かって）しただけで特になにも言われなかった。

少しホッと安心したところで自分の右手に違和感を感じ、ジーっと自分の手を見つめる。

「…沖田さん」

「なに？」

「この手はなんですか？」

何故か千鶴の右手と沖田の左手が繋がれていた。

「だって考え事をしながら歩いてるから。転ばないための防止対策かな」

「もう大丈夫です。ありがとうございました」

キッパリそう言って手を離そうとするが、びくともしなかった。何回か試みるもすべて空振り。

「…離して欲しいのですが」

努めて冷静に言ってみるが、異性と手を繋いだ経験など初めてなので、自然と顔が赤くなるのが分かった。

「顔が赤くなって可愛いね。やっぱり女の子だもんね」

「えっ!？」

いつから分かっていたのだろうか。

旅の間も京で聞き込みをしていた時も誰も気づかなかったのに。

今度は顔が青くなって面白いな、と思いながら沖田は答える。

「最初からかな。前にいる鬼副長も斉藤君も気づいてるよ。屯所に着いたら男装の理由も教えてね」

「……………」

正当な理由で男装をしていたのだが、彼らにとっては見てはいけないものを見られて上にはこれでは余計に不信感を与えているのだろう。

年頃の娘が普通することでは確かにない。また1つ不安材料が増えた。

離してもらうことを諦め、空いていた左手で頭をかかえる。

屯所に戻ってから言えればいいのに。

きっと手を繋いでいる状況以上に気になる話題をわざと言ったのだ。

何故そこまでこの状況でいたいのかは分からないが。

分かったことが1つだけある。

絶対そうだと自信を持って言えることが。

（沖田さんは絶対性格が悪い！）

別の意味で新たに屯所へ行くことに不安を感じる千鶴であった。

処遇？

あれから沖田と不本意ながら手を繋ぎ屯所まで来ると、広間まで連れていかれ幹部達の前に座らされた。

念のためと小太刀を取られ、両手は縛られている。

小太刀を取られた時、大切な物だと涙ながらに訴えると、眉間に皺を寄せた男がわずかに顔を緩ませ「危険がないと証明出来たら返してやる」と言った。

今千鶴は丸腰で幹部達の前に座っている。

小太刀を取られたことだけでも辛いのに、突き刺さる視線に肉体的にも精神的にも限界がきていたが、必死に我慢した。表面上には冷静に見えるように。

そんな千鶴を不憫に思ったのか、局長―近藤は笑顔で千鶴に話しかけてきた。

自分の紹介から副長の土方、総長の山南の紹介までした時に土方に止められ、落ち込んでいる姿がなんとも言えず、人を惹き付ける不思議な魅力の人だと感じた。

気恥ずかしさを感じたのか近藤は咳払いをし、口を開く。

「さて、まずは改めて話を聞かせてくれるか？」

近藤の視線を受けた斉藤は頷き、話し始める。

「京の町を巡回中に浮浪浪士と遭遇。相手が刀を抜いたため、斬り合いとなりました。浪士を無力化にすることには成功しましたが、隊士達が失敗した様子を目撃されています」

斉藤の説明の後、今度は土方が口を開く。

「それでおまえはどうなんだ？」

千鶴は一呼吸置き話し始める。

「私は浮浪浪士に襲われそうになったので、逃げました。そこで隊士の方々が浪士を斬り伏せてくれましたが、私にも襲いかかって来たので、応戦しました。そこからは沖田さんがよくご存じだと思います」

土方の問いに、正直に答えた。

嘘も言えたが、沖田には戦っているところも見られているし、裏で土方も斉藤も見えていただろう。どうせばれるのだ。

彼らにとって都合の悪い――白髪の男達を完全に見てしまっている。勿論見ただけではなく、斬っても平気だったことも知っている。

「おまえが正直者ってのは分かったが：正直すぎるだろう」

赤毛の男に同情の眼差しと共に言われる。

周りの目も少し同情気味だ。

特にこの男達の中で言えば小柄な髪の長い少年が、一番それが強いように思える。

殺したくないが、仕方がない――そんな彼らの声が聞こえるようだ。自分は正直に話しをした。

それに対しては後悔してない。

死ぬことに対して諦めてない、諦めてないが最悪そうなった場合、嘘をついたまま死ぬことだけは絶対に嫌だった。

自分はどんな表情でいるのだろうか、と千鶴思った。
冷静に見せているが、冷や汗が頬を伝っているのが分かる。
内心動揺しているのがバレバレだろう。

ふと沖田を見る。

情けない姿を見せている千鶴に対して、彼は笑っているのだと思った。

そう思っていたが……違った。

彼は千鶴を見ていた。

真剣に、他に言いたいことはないのか、そのままでもいいのかと言っているかのよう。

ハッとした。

何のためにここまで来たのだ。

父を捜すまでは、絶対に死んではいけないのだ。

千鶴の様子に沖田は満足そうに笑った。

今までで見た中で一番純粹な笑顔だった。

頬が赤くなるのを感じる。

（屯所に来るまでは意地悪だったのに……そんな表情ずるいです）

それでも当初の目的を思い出させてくれた沖田に感謝し、勇気を振り絞り近藤に話かける。

「あの……私の話を聞いてはもらえないでしょうか？京へ来た理由があるんです」

千鶴の願いに近藤は「事情があるのかな。話してごらん」と頬笑み、優しく言ってくれた。

チラッと土方も見るが、特に何も言われなかったので話して大丈夫なのだろう。

他の幹部達も興味があるようでジッと千鶴を見る。

視線は強いが最初よりも幾分鋭さが消えたことに安心する。

千鶴は皆に聞こえるようにはつきりとした口調で話し始めた。

?

「行方の分からなくなったお父上を捜しにわざわざ江戸から京まで……」

千鶴の話聞き、特に出身も同じだったことで余計に親近感もわき近藤は感動していた。

他の者も近藤ほどではないが、女1人でここまで来たことに驚いているようだった。

千鶴は軽く自分の自己紹介をし、行方が分からなくなった父を捜しに江戸から京へ来たこと。そして旅の危険を少なくするため、男装していることを話した。

女であると告白をした時に不安はあったが、近藤を含め気づいてなかったのは3人だけでほとんどの幹部は女だと気づいており、特にそれについて深入りされることはなかった。

理由も筋が通っており理由も本当の事なので、危険度が上がる事はなく千鶴は安心する。

男装について理由を教えて、と沖田から言われていたが、なんの面白みのない答えだったので、もう興味もないだろうと勝手に決め付ける。

沖田の顔を見れば何を考えているか少しは分かるだろうが、先ほど沖田の笑顔を見た後から何故か顔が見れないのだ。

何故かとっても恥ずかしくて顔が赤くなる……が今はそんなことを気にしている場合ではない。

千鶴は、そのことに対して考えるのをやめにする。

「それで雪村君。お父上の名前を聞いてもいいかい？」

近藤の笑顔と柔らかい物言いにホッとし、千鶴は話の続きをする。

「はい。父の名前は雪村鋼道と言いまして蘭方医を…」

「なんだと!？」

千鶴の話の途中に土方が突然声を荒げる。

他の者も声には出さなかったが驚いているようで、空気が最初の頃のように緊張感漂うものに戻っていた。

あまりの急な変化に千鶴は戸惑う。

「わっ…私何か余計な事を言ったでしょうか?それとも父が何か…」

不安そうに聞く千鶴に申し訳なさそうに近藤が口を開く。

「不安にさせてしまい申し訳ない。いや、まさか鋼道氏の娘さんだったとは…実は鋼道氏の行方を我々新選組も追っているのだよ」

「えっ!父様を？」

一瞬最悪な事態を想定するが、「違う」と近藤が否定したので一安心する。

「……それじゃお前を殺すことは出来ないな。鋼道さんの娘なら父親の顔は誰よりも分かるだろうし、捜す手間も今よりマシになるはずだ。見つかる可能性が上がるならそれに越したことはねえ」

相変わらず険しい顔をしているが土方の言い方は、千鶴を殺さない理由が見つかって喜ぶ……とまではいれないが、どこか安心した感があった。

その事で殺さなければいけないとは思ってはいたものの、本心からではなかったことが分かった。

現に土方の言葉を聞き、腑に落ちない者もいるようだが、反対する者はいないようで他の者も命令されれば殺しはしただろうが、望んでいる事ではなかったようだ。

「良かったな、おまえ！見逃してもらえて」

「あっ……はい……」

髪の長い小柄な青年——藤堂平助が一番に千鶴に声をかける。

千鶴に対し同情心が特に強かったようで、嬉しそうにニコニコ笑っている。

それに対して間の抜けた返事をした千鶴に今度は赤毛の男——原田左ノ助が声をかける。

「どうした？せっかく良い結果になったのに嬉しくないか？」

「いっ……いえ、そんなことはないです……」

嬉しい、と言おうとしたのに胸が詰まり何も言えなくなる。

見逃してもらえた事は嬉しいし、これで父を捜しことができることも嬉しい。

だが……。

嬉しさの前に千鶴は溢れ出る感情に自分を抑える事が出来なかった。

本当は怖かった。

怖くて怖くて……逃げ出したかった。

それでも父を捜すという目的のため、耐えるしかなかった。

人とは思えない白髪 of 男達と出会い、初めて人を斬り、その上百戦

錬磨のような男達に囲まれ、1人その厳しい眼差しを一心に受けた。並みの男でも根を上げる状況に、気丈に千鶴は対応していた。

そこで「殺さない」と言われ、張り詰めていた糸が切れてしまったように、目から涙が溢れた。

先ほどまで気を張って幹部達の前で堂々と対応をしていた千鶴の姿はどこにもいなかった。

そこにいたのは年相応の少女の姿だった。

?

「……すみません」

謝罪をしながら顔を隠し、声を出さず泣く姿に胸が痛くなる。
華奢な肩が震える度に罪悪感を増長させる。

(くそっ！)

幹部の中で特に千鶴に同情気味だった藤堂は心の中で悪態をつく。
新選組を守る為に怪しい者は徹底的に取り調べ、尋問する事は賛成だ。

しかし、目の前の少女の目を見て話を聞いている内に問者ではないことは、これまでの経験から培ってきた勘で違うと判断した。
だが、局長や副長が判断を見極めている中、勘だけで意見を言うのもまた躊躇してしまい、結果千鶴を泣かせた事に自己嫌悪に陥る。

無理もないだろう。

千鶴の話が本当ならば、長旅で京へきたその日に白髪の男達——新撰組に出会い戦い、心身共に疲れているところに、この尋問だ。
並みの男でも根を上げるだろう状況に、気丈に対応していたのだから。

そこで「殺さない」と言われ、張り詰めていた糸が切れてしまっても無理はない。

他の幹部の様子を観察すると、表情には出していないが、大なり小なり罪悪感を感じているようだ。

幹部達の殺気を含めた眼差しに多少怯えているようにも見えたが、堂々と受け答えしている様子に大丈夫だと勝手に思った。

でも違ったのだ。

ただ必死に殺されない為に、父を見つける為に、必死に恐怖を隠していただけなのだ。

この少女に何をした。

自分達の秘密を知られたかとしても、疑問には思うだろうが真実は分からないだろうに。

だが、新選組を守る為にはこうするしかないこともまた間違っていないわけで……。

（あゝどうしたらいいんだよっ！）

先ほどから堂々巡りだ。

だが、後悔はしているものの間違っではないと思っているのに、謝罪するのは違うと思う。

（そういえば……）

藤堂はある人物——沖田を見た。

疑問に思っている事があった。

普段の沖田ならば少女だろうと子どもだろうと、新選組——近藤に危険となる可能性のある人物は徹底的に排除してきた。

あの薄ら寒い笑顔で「殺しましょうよ」とすぐ言うはずである。

それなのにそんな台詞は一言も言わず、今に至る。

沖田の様子を思い返してみると、他の幹部と同じように千鶴の様子を真剣に見ていたが、殺気は出ていなかったと気づく。

（変だ！おかしすぎる！！）

再び沖田の様子を見るが、やはりあの薄ら寒い笑顔も殺気も出して

ない。

千鶴の様子をただ見守っているように思える。
あまりにも凝視していた為、沖田がこちらに気づき目線だけ合わさる。

藤堂の様子を見て一瞬溜息をついた後、立ち上がり千鶴に近づく。

やばい、と思った。

やはり今まで大人しかったのは近藤の手前わざとそうしていただけで、「殺さない」と判断が下ってから行動を起こすつもりだったのだ。

これ以上心の負担を千鶴にかけるわけにはいかない。

止めようと思って声を出そうとした時、目を疑う光景が目の前にあった。

千鶴の頭を優しく撫で、なおかつ見たこともない笑顔の沖田がそこにいた。

(え~~~~~~~~っ!?)

声に出さなかったことを褒めてもらいたい。

藤堂は心からそう思った。

?

ポンポンと千鶴の頭を優しく撫でる。

安心させるように、大丈夫だよという気持ちを込めて。

驚いたように千鶴は頭を上げるが、「すみません。すぐに泣きやみますから…」と言ってまたすぐに顔を隠すように下げる。

千鶴の両目から涙が溢れていた。

綺麗だな、と純粹に沖田は思った。

泣かせる原因を作ったのはこちら側なので、自身も多少の罪悪感はあるが他の者よりはマシだろう。

尋問をしている際も沖田は千鶴のことを疑ってはいなかった。

初め——新撰組を見られた時は、厄介だとか殺すかと思っていたのだが、あの目を見た時その考えは一瞬で消えた。

本来の自分は一番組組長としてもそうだが、何より近藤の為の剣になると決めた時から少しでも仇なす者が居たら徹底的に排除してき

た。

近藤の事が一番である考えは今も変わらない。

だが、新撰組を見た時の恐怖で怯える目から立ち向かうと決めた、あの澄んだ目。

それを見た時に、何かが自分の中で変化した気がしたのだ。

この子を死なせてはいけないと。

それに尋問の際の千鶴の言葉に、嘘はないと確信している。

この場にいる幹部達もそれは分かっているとは思う。自分と同じように千鶴の目を見たら直感で感じている筈だ。

自分達の探している鋼道氏の娘とはさすがに思わなかったが。

とにかくこれ以上千鶴を泣かすつもりはないし、泣き顔を見せるのもなんとなく嫌だ。

今日はこれ以上詮索をしても無駄であるし、それになにより千鶴には休養が必要だと感じる。

沖田は眉間に皺がいつもより寄っている土方に目を向ける。

「土方さん、今日の所はこれぐらいにしても良いですよ。この子も疲れているでしょうし、あの使っていない部屋で休ませてあげても良いですか？」

本来なら局長である近藤に許可を得るべきだが、面倒な人（副長）から先に得なければ後から面倒な事になるのは目に見えている。土方も沖田の思惑は手に取るように分かっていたが、千鶴の様子を見ると今夜はこれで終わらせた方が良いと判断する。

「どうせ俺が拒否しても休ませるんだろ。明日にまた詳しい事を決める方が得策だろうな。近藤さんそれで良いか？」

「そうだな。長旅で疲れているだろうし、休ませてあげなさい」

「分かりました」

そう言って千鶴を横抱きにし立ち上がる。

沖田の行動に皆唖然とし、その場は静まり返る。

千鶴も驚いているようで、口をパクパクさせている。

「おいっ何をしているんだ！」

いち早く冷静に戻った土方が声をかける。

表面上は冷静だが、眉間の皺がさらに寄っており、焦っている事が見知った者――沖田にはよく分かる。

その様子に嬉しそうに沖田が笑う。それはもう本当に嬉しそうに。沖田と土方の無言のやり取りの最中一番パニックに陥っているのは、沖田の腕の中に居る千鶴だろう。

（なっ……なんでこんな事に!？）

千鶴も恥ずかしいので、下ろしてもらいたかったのだが、2人の様子
と沖田の笑顔に口をはさむのを止める。

休ませてもらう事は本当に嬉しかったし、許可を取ってくれた沖田
に感謝してはいるが……この状況は勘弁してもらいたい。

千鶴の目線に気づいたようで、土方に向けていた笑顔を千鶴に向ける。

「何かご不満でも？せつかく身体も疲れてるだろうし、抱っこして
移動してあげようとしている優しい僕に何か言いたいのか？」

「……………」

本当は今すぐにでも下ろしてもらいたいのだが、沖田の笑顔に何も
言えなくなる。

それは千鶴だけじゃなく、他の者も同じようでもう誰も助けしてくれ
ない。

土方も諦めたようだ。

（この人を誰も止める事はできないの……？）

近藤を見ると何故か感動し目に涙を溜めて喜んでいるし、土方はも
う関わり合いたくないようで沈黙を守っているし、他の者も顔を赤
くしたり目線を別の方向へやったりと完全に助けしてくれる気配はど
こにもない。

心身共に疲れ切っている千鶴は、目線を下げ抵抗する事を止める。

「そうそう。良い子でいたら何も悪い事は起こらないからね」

（言ってる事が誘拐犯と一緒にですよ！）

そう声に出して言いたかったが、身の安全の為に心の中で叫ぶ事にする。

「部屋まで連れて行きますので、それでは失礼します」

一応礼儀正しく頭を下げ部屋から出て行く沖田。

千鶴も頭を同じように頭を下げる。

異性にこのように密着した経験もないので、初めは緊張していた千鶴だが、先ほど頭を撫でてもらった時の様に思いの外腕の中も気持ちが良いことに気づく。

部屋を出た後話しかけてきたり、からかうかと思いきや無言のまま進んで行く。

沈黙が苦しいと思ったことはあるが、今は不思議と心地よかった。

何故だろうと思うが、限界に来ていた千鶴は考えるのを止め、意識をそっと手放した。

？

耳を塞ぎたくなるような叫び声と白髪 of 男達の笑い声。

人を斬る感触。

赤い血の色。

千鶴の頭の中で、次々に昨晚起こった出来事が脳裏に蘇る。

顔から血の気が引くのが、分かる。

人を斬った事は、初めてで……だがそうしなければ自分が殺されていた。

この時代はそうして生きなければいけない事もある。

悪い事ではない。正当防衛である。

しかし頭で理解していても、心がついていかないのだろう。

(怖い……父様に助けて欲しい)

千鶴はある理由で、あまり人と関わる事が少なかった。

それは成長すると共に極端に少なくなっていく、最後は父と定期的な教えに来てくれた小太刀の先生と舞踊の先生ぐらいであった。

それ故、周りに同世代は少なく大人が多かった事もあり、素直に甘えられるのは父ぐらいであった。

心で幾ら父に助けを呼んでも返事があるわけもなく、絶望感に苛まれる。

そのまま泣き崩れそうになるところで、温かいモノが千鶴を抱きしめる。

(なんだろう？けど、懐かしいな)

一定の間隔で頭や背中を優しく触れ撫でる感触。

小さい頃怖い夢を見た時、父に慰めてもらった時と良く似ている。今も優しく頭に触れるのは手だろう。

けれど父よりも大きい手のような気がする。

(……あれっ？手？なんで手が？それに父様よりも大きいってどういうこと？)

ハッと目が覚め、現状を確認する。

目ぼけた頭であるが、1つ1つ整理していけば理解できるはずだ。まず温かいと思ったモノはどうやら人の身体らしい。

背中と頭に触れていたのは、やはり手であった。

では誰に抱きしめられているのだろうか。

そこが問題である。

女の人であればそこまで問題ではないのだが、感触から男の人である事が分かる。

千鶴は先ほどとは違う意味で、顔から血が引くのが分かった。

嫁入り前の娘が、男の人と一緒に寝る事など非常識である。

(なっなんでこうなってるの……!?)

泣きそうになりながらも昨晚の事を思い出そうとするが、頭がパニックになり上手く働かない。

そんな千鶴の様子が面白いのか頭上から笑い声が聞こえた。

(そっ……その声は……)

ギギギッと機械の様に顔を左に回し見上げると、朝から爽やかな笑顔が見えた。

他の女の人が見れば見惚れて顔が赤くなるだろうが、今の千鶴には

さながら悪魔の笑顔にしか見えなかった。

「何してるんですか！沖田さん！！」

精一杯睨みながら怒るが、怖がる様子は全くなく、むしろ余計に楽しそうに笑う姿に腹が立つ。

「あははっ！君面白いね。昨日とは全く違って。フッフ、それが君の素なのかな？」

「話を逸らさないで下さい！どうしてこんな状況になっているんですか〜？」

「ん〜僕は全く悪くないんだけどな〜。千鶴ちゃん右手見てみて？」
「また話を逸らそうとしてるんですか？」

そう言いながら千鶴は自分の右手を見ると、沖田の袖をギュッと握っていた。

それはもう自分でも驚くぐらい固く固く握りしめていた。

「えっ…あっ…すっすみません！！」

急いで謝るが、時すでに遅し。

「僕だって年頃の娘さんだし悪いと思って手を外そうとしたんだよ？けどそんなに僕と一緒に居たいのに無理やり外すのも悪いかな〜と思って。千鶴ちゃんの所為なのに、僕を責めるなんてお門違いだよね〜」

（いやいやいやっ！そこは全力で外して頂いてかまいません！）

……と心で思っているにも自分が原因であるので、言える訳がなく素

直に謝る。

「素直な子は嫌いじゃないよ、良い子だね」

「もう頭を撫でてもらわなくて結構です！あといい加減離して頂きたいのですが……」

「えゝゝゝまだ良いでしょ。起きる時間はまだ先だよ？」

「私が良くないんです！お願いですから離して下さいゝゝ！！」

千鶴は離しながら沖田の腕から逃れようとするが、なかなか逃れる事が出来なかった。

そんなに力を込めてるように思えないが、男女の力の差だからしょうがないのだろう。

しかし、諦める事はできず必死に何度も試みる。

押し問答の末、千鶴が沖田の腕から逃れる事が出来たのは、それから随分先の事。

斉藤が土方の使いで千鶴を呼びに来た時まで続いていた。

?

目の前にいる土方の顔に怯えながら、千鶴は横に座っている沖田に心の中で怒りをぶつける。

土方に怒られる原因を作り、その所為で一緒に説教を受けているからだ。

ほとんど対象は沖田に向かっているが、全く怒られない訳ではなくチクチクと小言を言われている。

何故このような状態かというと、千鶴を呼びに来た斉藤が部屋にいた沖田と千鶴の様子をこ細かく土方に報告をしたからである。

本来であれば千鶴1人が呼び出され、今後についての最終決定が下されるはずだった。

眉間に皺を寄せた男と2人きりも精神的に辛い、この3人での状態も甲乙つけがたいものがある。

自身が裾から手を離さなかったのは申し訳ないが、沖田にかかれば絶対離せない事はなかったはずである。

それをわざとしなかったのは何故か?……きっと千鶴で遊んでいるのだろう。

出会って2日目、からかったりわざと騒ぎを大きくしたりするが、急に優しくしたり労ってくれたり……と様々な表情を見せてくる沖田を全く掴む事が出来ず、謎は深まるばかりである。

現に今も土方からの説教を受け流し、飄々とした態度で更に怒りを煽っているように思える。

チラッと沖田を見て観察すると、翡翠色の目と目線が合った。

「っっ!」

途端に火がついたように顔が赤くなり、動機も激しくなる。

原因は分かっている。

（きっとこれは一夜を共にした事と——勿論全く何もなかったけど——寝顔を見られた気恥ずかしさからくるものだよ。うん！そう思うようにしよう！！）

そう思わなければ冷静でいられない。

嫁入り前の少女にとって異性と一夜を共にするなど、あってはならない事である。

これはもう忘れよう。忘れた方が良いと結論づけることにする。

それに今は最終決定が下されるのだ。殺されないと分かっているだけマシであるが、それでもどんな事を言われるかは分からない。

今はそれに集中しなければいけない。

隣にいる沖田を意識から外し（酷い）、目の前の土方に集中するようにする。

千鶴が悶々と悩んでいる間に、土方は1人で怒り続けている自分が情けなくなっていた。

沖田は相変わらず生意気な態度であるし、反省の色が全くこれっぽっちも見られなかった。

千鶴に対しても怒っていたが、悪魔の餌食になった被害者の1人である。

どういう経緯でああ言った状況になったかは分からない（知りたくもない）が、仮にも新撰組一番組組長である者が嫁入り前の娘に無体を働いたとは思えない（思いたくない）ので、きっと新しい玩具（千鶴）を手にして喜んでいるだけだろう。今回はそれが行き過ぎただけだ。絶対……いや多分。

それに昨日からの千鶴の態度を見ると、意見ははっきり言う性分だと分かっているので、本当に何かあった場合は言うはずだ。

何も言ってこない。酷い事はしてない（多少何かはあっただろう）と結論を出し、1人説教をし続け疲れてきた土方はさっさと本題に入る事にした。（これも酷い）

沖田を部屋から出して話を進めたかったが、部屋から出ていくよう目線を送っても無視するので、こちらも無視をする事にする。

「……もうこれ以上の説教は終いだ。それで雪村、お前の事だが……」

「はい」

いよいよ本題に入り、千鶴は姿勢をさらに正し最終決定を聞く構えをとる。

殺されない心配はないが、どんな処分内容がくるか分からない状態で不安だろくに毅然とした態度で迎えようとする千鶴に対し土方は自然と口角を上げる。

「とりあえずお前の事は拘束させてもらう。信用出来るまで悪いが、大人しくしてろ。余計な事をしたらその分自分の首を絞めると思え。いいか絶対逃げるな」

「……分かりました。」

殺されるよりは遥かに人情的な決断だ。

それに大人しくしていたら危害は加えないと言われている。

ただ言われるままにすべてを了承する事は出来ない。

「お願いがあります」

千鶴の言葉に警戒心が高まったようで、土方が眉をさらに顰める。沖田は面白そうに事の様子を見ているようだが、隙は1つもない。2人の様子に千鶴は心の中で溜息を出す。

(当たり前だよ。お願いなんて普通しないもの)

所詮自分は彼らにとって得体のしれない、余計な者を見た厄介な人間でしかないのだ。

それで良いはずなのに、昨日までなら何も思わなかったはずなのに、チクンと胸が痛んだ気がした。

小さな胸の痛みを無視するように言葉を続ける。

「大人しくしてます。余計なことはいないように気をつけます。ただ父様……父のことよろしくお願い致します。自分勝手に申し訳ありませんが、本当に心配なんです。お仕事の合間でかまいませんので、手がかりを見つけて下さい」

少しでも気持ち伝わるよう、深々と頭を下げ懇願する。

本来なら自身が1日中間き込みをし、捜したいぐらいなのだがそうはいかない。

それなら千鶴に残された方法は、目の前にいる新選組に頼るしかないのだ。

「大丈夫だよ」

必死に懇願する自身の頭に優しくポンポンと撫でる手の感触があった。

誰の手かは顔を上げなくても分かった。それに自分にこういった事をするのは、この場では1人しかない。

「沖田さん……」

「本当は君が一番捜しに行きたいのにごめんね。けど鋼道さんの事は約束する。絶対捜すから。だから僕達に信用されるように……大

人しくしててね。信用できたら君も捜しに行けるようにしてあげる。そうでしょう土方さん？」

「はあ……そうだな。こっちの事情に巻き込んで悪いが、とにかく大人しくしてくれ。信用出来たらいずれ、巡察と一緒に連れて行くように手配する」

「あつ、ありがとうございます！」

2人の言葉に胸が温かくなる。

本当はこんな事はしたくないのだろう。けれど、新選組という組織を守る為ならどんなことでもするのが、きっと彼らなのだ。

巻き込まれた当初は怒りや悲しみ、警戒心が強かったが、人に対して負の感情を長く持つ事が出来ない性分なので、今は少しずつ警戒心も薄れているように思える。

勿論完全ではないが、それでも彼らの優しさは伝わり嬉しく思う。

「それともう1つお願いがあるんです」

実はこちらも千鶴にとって重要なお願いだ。

ただ彼らが許してくれるか、言うのが怖いが今なら言えるような気がする。

「なになに？言ってみて」

「聞くだけになるかもしれないが、言ってみろ」

2人から許可も貰ったので、はっきりとした言葉で伝える。

「実は……」

？（後書き）

読んで下さるだけで嬉しいのに、お気に入り登録や評価などありがとうございます！

凄く嬉しいです！！

ちょっと中途半端なところで終わってしまいましたが、次回に持ち越しです。

それではここまで読んで頂き、ありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4004s/>

桜香

2011年5月27日12時23分発行